

戦時下における地理学の軍部との協力について

—終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想から—

石井素介*

Motosuke, ISHII

On the Collaboration of Geographers with the Military during the Wartime Japan:

Memoirs of a former geography student mobilized at the Military Staff Headquarters in 1945

はじめに

毎年夏の8月15日が近づくと、終戦前後の話題がマスコミでよく取上げられるが、敗戦から60年以上が経過した近年になっての新しい傾向として、ようやく何かの呪縛から解放されたかのように、日本が戦争をしていた最終段階、つまり第二次世界大戦（いわゆる「大東亜戦争」）の終末期の日本がどんな状況であったのか、そしてまた、戦前から戦後への移行が果たして「断絶」それとも「連続」の何れだったのか、などの問題について改めて見つめ直そうとする動きが各方面に出てきているようである。

しかし戦後の60余年の間、世界の各地で起っている大小の戦争についてマスコミを通して見聞きしてはいても、直接自分に係わる戦争を体験しないまま平和に暮らしてきた人々が人口の大多数を占める今日の日本では、「戦時下」という言葉がもはや遠いよその国の話のようになってしまったとしても無理はない。その意味でも、戦時中に生じた事柄の真実を後世の人々に伝えることは、その時代を体験した人間にとって、一つの重要な責務と言えるのかもしれない。ところが、いざその時代を語るとなると、実はそれが決して容易な仕事でないことが次第にわかって来る。体験者本人を取り巻くいわゆる「世間的」な人間関係から、本人内部の自己弁護への心理的葛藤に至るまで、様々な障壁が正直な語りをついつい鈍らせ歪めてしまうからである。とりわけ話が軍国主義への迎合や軍部への協力の問題に関係するようになれば、なおさらのことである。

地理学の世界でも、戦時下の地理学関係者はどんな役割を果たしていたのか、戦争や軍部への協力は無かったのか、といった問題については、確かにこれまで言わばタブーのように扱われていて、誰も

が事実上研究対象にすることを避けてきたのであった。当時のことを知る主な当事者たちの大部分が、何事も語らないまま世を去ってしまった今日、残されたわずかな記録や史料から事実を掘り起こすのは容易な業ではないと思われる。

そうした状況のもとで、地理学の世界で、かつて軍隊が作成した地図やいわゆる「兵要地理(誌)」とはどんなものだったのか、などについて改めて見直してみようという動きが出てきたのは、まことに画期的なことと思う。その動きの一例が、戦時中に日本の軍隊（主として「陸地測量部」）によって作成された海外植民地等の地図類、いわゆる「外邦図」の利用・評価に関する大阪大学を中心とする研究グループの結成であり、またそれに関連して出てきた、一部地理学者の軍部への協力の問題についての検討の動向がそれである。

私がこの大阪大学の研究グループの存在を知りきっかけになったのは、本誌「空間・社会・地理思想」第11号に掲載された源昌久氏の論文¹⁾の注に出ていた「参謀本部渡辺正氏所蔵資料」という記事であった。そのいきさつは後述の通りだが、この記事がはからずも第二次大戦の末期に、私自身が参謀本部に出入りしていたことを想起させてくれたのである。

その当時私は、たまたま地理学専攻の学部在生として、参謀本部というまさに軍部の中核機関の末端に研究動員学徒という資格で居合わせたのである。もちろん、はるか60年以上も昔のことであるとはいえ、決してそれを忘れていたわけではないのだが、ろくに資料も残っておらず、私自身としてはこの殆んど忘却の彼方に震ってしまった体験を、改めて自分の研究対象にしようなどとは考えてみたことも無かったのである。それだけに、地理学や地図学がたどった歴史の中でも言わば影の部分に置かれてきた、この戦争や軍部への協力という問題につ

* 明治大学名誉教授

いて、改めてこれを客観的な視点から新しい研究課題として取上げる研究組織が結成されたことについて、これはまことに有意義な研究だと感得させられたわけである。

ただその場合には、十分に練られた多面的・科学的でかつ批判的な史眼が要求される、ということを決して閉却してはならないであろう。戦時下の諸現象に対しては、とかく現代の価値観から、記録の字面だけに抛りながら一方的に論断する傾向に陥りがちだからである。さらに踏み込んで言うならば、いわゆる「国民精神総動員体制」のもとで、何処にも「逃げ場所 (Asyl)」の与えられていなかった当時の日本に生きていた人々の揺れ動く行動を、現代の「安全地帯」に生きている私たちが、安易に一面的に都合よく価値判断してしまうのは、余りにも問題があり過ぎるのではないかと思うからである。

私自身の場合について言えば、終戦の当時、ようやく学問の世界に足を踏み入れたばかりの修行中の学生であったとはいえ、参謀本部というまさに軍部の中枢機関の現場に偶然居合わせ、その空気を直接体験したわけであり、その上若干の参考資料の提供を受けたのだから、この機会に何とか自分に出来る限りの協力の役目を果たさねばなるまいと考えたのである。そこで、この60数年前の、ほとんど消えかかった記憶を頼りにしながら、当時の現場の状況をできるだけ誤りの無いように若い人々に伝えるべく努力してみたいと思う。

しかし、回想というものは、まさしく「玉ねぎの皮をむく」ようなもので、時には眼に沁み肌を刺すところがある。それは、自分でも無意識のままに、ややもすれば好都合な解釈に向けた面ばかりを強調することになりがちで、後になって自責の念に苛まれるようなことにもなり兼ねないからである。そうした自戒を込めながら、以下に私なりの体験についての回想記を試みることにしよう。

以下の記述は、「外邦図」研究グループの主査である小林茂教授宛の手紙に書いたことを中心としてまとめた「終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想—「皇軍」における「兵要地理」のあり方と応用地理学の立場—」と題する報告で、「外邦図研究ニューズレター」第6号(大阪大学大学院人文地理学教室2009年3月発行)に掲載されたものを土台とし、これに若干の修正加筆を施したものである。この転載についてのご諒承をいただいた小林教授ならびに外邦図研究グループの方々に謝意を表したい。

1. 「外邦図」研究グループの活動に接して

2008年の6月頃、たまたま大阪市立大学発行の雑誌「空間・社会・地理思想」第11号(2007年12月)を見ていたところ、終戦前後に大本営参謀本部に勤務していた渡辺正少佐の所蔵資料集のことが注記に引用されているのを発見して驚いた。この人は旧知の人というほどではないが、私が短期間そこに動員され通勤していた当時、時々顔を見たことがあり、特に参謀将校の中では地理学の学者や学生の動員に熱心な人として評判になっていたからである。その頃、つまり1945年の終戦の前後に、私が「研究動員学徒」として参謀本部で働いていた時代のことは、漠然とした思い出としてある程度記憶に残ってはいるものの、頼りになるような記録は何ひとつ残っていない。単なる思い出の短文として当時のことを一二度書いたことはあるが、何かもう少し確実な手掛かりになるような記録は出てこないものかと、かねてから探していたのであった。そこで早速、その『渡辺正氏所蔵資料集』の発行元である大阪大学の人文地理学教室に手紙を出して送ってもらうことにした。

そうして届いたのが、大阪大学大学院人文地理学教室発行になる『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集—』ならびに「外邦図研究ニューズレター」(No.1～No.5)(大型A4判)のワンセットであった。これらは、予想の通り大変興味のある内容で、特に幾つかの部分は私自身の体験した通りの内容が記述されており、記憶を新たにさせられる思いで読んだ所や、当時身近かにあった出来事でありながらまったく知らなかった事実を教えられた部分もあり、興味津々たる思いで読ませてもらった。

この報告書シリーズは、もともと、国内の幾つかの大学の地理学教室に保管されてきた、いわゆる「外邦図」(これは旧陸軍の陸地測量部等が、旧植民地のほか、アジア大陸や南方諸地域を対象に作成した地図類で、終戦直後に参謀本部の地下倉庫から国内の幾つかの大学・研究調査機関に搬出・保存されているものを指す)が持つ日本の地理学史・地図学史上での重要性に着目した研究グループが、大阪大学の小林茂教授を中心として組織的に進めてきた調査研究の報告書である。その内容のうち「ニューズレター」の方は、2002年度以降の各年度のメンバーの調査研究活動の記録と、関係のある長老研究者を招待しての回顧談聴取を含めて開催された数回の研究会報告を取録したものである。

これらの記事中特に興味を引かれたのは、東大名誉教授の佐藤久氏が戦時下の東大地理学教室や当時の教室主任であった辻村太郎教授の動向について手帳日誌の記録等を含めて詳細に語っておられる部分や、また参謀本部からの地図類搬出を当時直接担当された地理学者の中野尊正・三井嘉都夫・岡本次郎の各氏らの生々しい想い出話であった。

一方、前記『渡辺正氏所蔵資料集』には、メンバーの一人で永年国土地理院に勤務されていた金窪敏知氏の人脈を通じて偶然紹介され寄贈を受けることになった渡辺正氏（元大本営参謀・陸軍少佐）の資料集の本文と解説論文数編が収録されている。資料集の内容には、戦争末期に計画実施された「兵要地理調査研究会合ノ件」、終戦時の秘密書類の焼却処理に関する件、陸地測量部組織の処理と内務省地理調査所設立に関する資料等が含まれている。

このうち「兵要地理調査研究会合」というのは、1945年4月30日に市谷の参謀本部内の会議室で数名の地理学者と第二部参謀たちとの合同で開催された研究会のことで、この会合には偶然、私自身も当時はいわゆる「研究動員学徒」の一人として参加していたのである。会合の場面、とりわけ辻村太郎教授と西水孜郎氏の二人が研究報告を発表された場面については、不思議なくらいありありと鮮明な記憶が残っているが、ノートや文書記録は何も無く、何かこの記憶を確かめるための資料は無いものかと、かねがね探していたのであった。

この研究グループの主要な研究対象である「外邦図」そのものについては、実は、私自身はこれという因縁も知識も無いので、この研究グループのお役に立つような情報提供はあまり期待できないのだが、終戦前後という時期に当時の日本の地理学者が軍部と直接の接触を持つことになったこの稀な場面に、偶然とはいえ私自身が直接居合わせるようになったというこの不思議な体験を、一体どのように自分で納得し決着をつければよいのか、改めて考え直すきっかけを突きつけられた様に感じたものであった。

それはともかくとして、これらの報告書と研究ニューズレター等の資料全体をあらまし通読して感じたことの第一は、良くぞこれまでタブーのように放置されていたこの珍しい、しかも大変重要な問題が、ひとつの研究テーマとして真正面から取り上げられるようになったものだという点である。しかもその研究態勢の面においても、関係の諸大学や諸機関の研究者の人々を組織的に糾合して、内外の各地に蓄積されていた地図や空中写真についての情報が

発掘収集されているばかりでなく、各方面の先輩格の当事者の方々の貴重な証言や文書資料を発見し記録に残す努力が重ねられていることをも含めて、とにもかくにも、まことに敬服の至りと痛感させられたことであった。

私自身も、以前から本当はこうした分野の研究が必要なのだが、と痛感してはいたのだが、特別な契機もまた組織的研究を実行に移す能力の欠如もあって、無為に過ごしてきたのであった。現役を引退して後久しい現在となつては、もはやこれらの研究に積極的に参加するのはとても無理だが、せめて多少とも何かお役に立てることがあれば、協力の労を惜しむつもりはない。ただ、この貴重な資料が提供してくれる様々な情報を読みながら、これらを自分の中でどのように了解し消化すればよいのだろうか、といろいろ考えさせられる点が多く、すぐに一定の筋を通して報告するというわけにはいかないが、以下、そうした感想の一部を述べてみることにしたい。

「外邦図」搬出の経過について

先ず最初に、この「外邦図研究グループ」本来の主たる研究対象である外邦図とその運び出し（軍から諸大学へ）の一件についてのことだが、私自身が事実上ほとんど無関係であったために、この件に関しては、残念ながらあまりお役に立つような情報提供ができないことをお断りしなければならない。というのも、私が当時大本営参謀本部に研究動員学徒として通っていたのは、1945年の4月下旬から8月17日頃までのことで、その後はしばらく東京を離れることになったりしたので、その後の事情や東北大学・資源科学研究所等への「外邦図」搬出の際の状況等については、大分あとまで全く知らなかったからである。

ただ、今回関係の資料を通読してみて、また当時の知人の内何人かの人々の人間関係等から推理してみて、外邦図搬出の前後事情に関して最も正鵠を射た記述だと見られるのは、「外邦図研究ニューズレター」No.5に出ている岡本次郎氏の報告であろうと思う。ことにその最後の方で(p.46)岡本氏がまとめているように、この外邦図搬出が実現したのは、まず当時東北大学在籍であった田中館秀三教授と渡辺正少佐との間の親密な人脈関係の存在と土井喜久一氏の実行力との結合によって、東北大学行きの貨車一輛分の地図の搬出が実現されたのが第一段階で、次いでこの望外とも思われる情報が東大地理出身の土井氏を通じて多田文男教授に伝わり、それが中野

尊正・三井嘉都夫氏等の尽力によって第二段階の資源科学研究所行きの方として実行されるに至った、というのが実際の経過に近いのではないと思われるのである。

私自身の場合、その当の参謀本部に数ヶ月間も通っていないながら、動員期間の終りまで「外邦図」等の集積場所の存在を全く知らず、残念ながらそこに行ったことも無いまま終戦を迎えた。ただ、終戦直後の室内片付けや焼却作業の手伝いをしている際、自分で作業した地図の類や、廊下等に集積された不用物からは何でも好きな物を選んで持ち帰っても良いぞと言われたので、リュックに詰めるだけ詰め込んで2・3回下宿へ持ち帰るのが関の山であった。リヤカーなど運搬手段を使えればもっと大量に持ち出せたのであろうが、当時はそんなことまでとても頭が回らなかったのが実状である。終戦直後という時点のことを考えてみると、上記の第一段階のような離れ業が実現されることになろうとは、大抵の人々には夢にも思い付かなかったことであろう。

「兵要地理調査研究会」(1945年4月30日)傍聴記

次に、私の体験と直接結びつきがあるのは『渡辺正氏所蔵資料集』とその解説・解題を取めた『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』の中にある「兵要地理調査研究会合ノ件」の部分である。この会合には私自身、4人の「研究動員学徒」の一人として陪席参加したことをはっきり記憶している。4人の一人は、巻頭の写真図6の「第一次参集者芳名」の最後に鉛筆書きで追加されている吉川虎雄氏で、東大助手と書いてあるが、正しくは佐藤久氏と同じく(学年は一級後)当時のいわゆる特研究生(大学院特別研究生)であった。他の3人は地理学科の学部学生で、金崎肇(3年生)、戸谷洋と藤井(石井の旧姓)素介(共に2年生)であった。吉川氏は正規のメンバーとして、他の3人はお前らも来いと言われて陪席したのだと思われる。従って私たち学部生3人には何の責任も事後の宿題もなく、大学のゼミを傍聴するような気分で参加していたのを覚えている。

参加者の顔ぶれに関しては、記憶が明確ではないが、地理学界からの参加者は、渡辺少佐の記録にある13名というような多人数ではなかったという記憶が残っている。新井浩・矢澤大二両氏は棒線が消されている通り欠席だったが、他の人々の中にも出席しなかった人がもっといたはずである。いずれにしても、この「参集者芳名」というのは参集依頼の予定表であって、参集をどんな方法で依頼したのかという点や、実際の参加者が誰であったのか等につ

いて、なお確かめる必要があると思われる。

研究会合の内容についても、『所蔵資料集』巻頭の写真図5にある「予定表」にはこまごまと時刻を区切って予定の議事が書かれているが、実際はそれほど時間的に切迫した会議の雰囲気ではなく、普段の大学での合同ゼミの場合と同様に、報告の発表と質疑応答という調子で進行したような印象が残っている。むしろ、明瞭に記憶が残っているのは研究報告の内容で、主報告者の辻村太郎教授は、太平洋の火山列島とその周囲にあるサンゴ礁形成の地形学的特徴についての詳細な報告、副報告者の西水(すがい)孜郎氏(企画院の組織変更に伴ない当時は内務省国土局計画課所属)は、日本の食糧自給の可能性についての統計グラフを使った報告であった。これらの発表は、至極まともな普通の研究報告で、やや啓蒙的な内容のものではあったが、とりわけ戦争のために直接役立つような「兵要」地理的な独自性を持つというほどの内容ではなかった。もちろん、その場に出席していた参謀将校の側からは、幾つか兵要地理に関連した質問があったと思われるが、そのあたりのことはほとんど記憶に残っていない。あるいは私たち学部学生の場合、午前中にこれらの報告を聞いただけで解放され、午後の部には出席しなかったのかもしれない。

このときの研究会合についてこれだけ明瞭な記憶があるのに、残念ながら何ひとつ記録もメモ書きも残っていないのは、それから約ひと月の後、1945年の5月25日夜の最後の東京大空襲の際、当時住んでいた千駄ヶ谷の親戚の家で焼け出され、着ている服以外の蔵書やノート・アルバム等持ち物一切を失ってしまったためではないかと思われる。その点、「外邦図研究ニューズレター」No.3, No.4に掲載されている佐藤久氏の研究報告「地図と空中写真、見聞談、敗戦時とその後(正、続)」の丹念な記録と記憶に基づく記述は、薄れた記憶を蘇えらせ、また知らなかった事実を教えてくれる貴重な証言だと言えるだろう。ことに(続)の方の昭和20年代前半についての記述は、読み物としても興味津々であった。

特に、No.4号の報告中の小見出し「空襲の本格化と二つの講演会」の部分(pp.54-55)で書かれている二つの講演会(1945年1月27日の学士院での会と2月中下旬頃の参謀本部での会)については初耳であった(学生が参加するような会ではなかったであろう)。とりわけ後者の会の持つ意味は重要で、恐らくこの会合がきっかけとなって同年4月以降の参謀本部への「研究動員学徒」派遣が実行され

ることになったのではないかと思われる。

当時、諸学校では工場等への動員が全般化していたが、帝国大学ではまだある程度授業が行われ、一部の学生が軍の気象部や陸地測量部（佐藤久氏等）へ時々出向く程度だったようだが、1945年4月以降はいよいよ2年生以上は各所へ動員で派遣されることになったようだ。それでもなお、私の1年下の学年（西川治・高崎正義等の諸君のクラス）はまだ授業が残っていたようで、佐藤久氏の記述の続きによると、「この年度には辻村先生の「戦争地理学」と題する講話とゼミを折衷したようなコマ（単位外）が開設」されていたと書かれている。しかも、「そこで耳慣れた話材」である“飛行場立地と地形”の話がこの2月の講演会で報告されたようなので、「戦争地理学」と言ってもその程度のお話だったことが判明する。

また、前述のように1945年4月30日の『兵要地理調査研究会合』で私が聞いた辻村太郎教授の講演は、太平洋の火山列島とその周辺にあるサンゴ礁形成の地形学的特徴に関するものであったが、これは佐藤久氏が報告の前段（p.48）で触れている1943年11月25日夜の学士院での公開講演会における演題「太平洋地域火山の地理」の内容とほぼ同じもの（あるいはそれに多少兵要地理的考察を加えたもの）だったのではないかと思われる。これは私たち在校生が講義や土曜日のいわゆる「アーベント」談話で耳慣れた辻村先生得意のお話であった。

本土空襲が本格化し、米軍上陸による本土決戦が焦眉の課題となっていた時期である、この1945年4月末の「兵要地理調査研究会合」は、佐藤久氏も正直に繰返し触れているように、「もはや、いまの段階になってこんなことを・・・と、掛声のみが勇ましい本土決戦の前途が暗く見えた」（p.58）とか、「参集者の間にも、今となっては遅いんだヨナ！の空気が流れていた」（p.65）というような気分の下で開催されたものだったことは否定できないであろう。

陸軍士官学校の教科「兵要地理」について

もともと、兵要地理という教科は永年にわたって陸軍士官学校などの軍学校の正式科目として取上げられていたもので、士官学校で実際に使用されていた教科書を戦後見せてもらったこともある。こうした教科としての兵要地理は内容的には自然地理学概説のようなもので、その章節ごとに応用的解説が加えられたものであったように記憶している。これは戦前の中等学校で一般に使用されていた「軍事教練

必携」などと比べても、むしろ「軍人勅諭」や「戦陣訓」などに見られる精神主義を省いた「理料的」な感じのものであった。（なお、その後判明した士官学校地学教室についての情報は²⁾を参照されたい）

「外邦図」研究グループの中で、とりわけこの兵要地理に関連する分野の研究に集中的に取り組んでこられた共同研究者の故久武哲也教授がもしも元気で居られたら、私も多少はご協力することも出来たかもしれないのに、と残念でならない。有力な後継者の方々が出てくることを期待してやまない。

ただ、この分野の研究には公式的な文書記録のみでは判断しきれないような側面、例えば軍部や行政の官僚組織の側における科学研究成果の受け入れ方などの側面についても、特に欧米のケースとの国際的な比較の場合にはとりわけ十分に検討してみる必要があるのではないかと思われる。日本の地理学界の場合、行政的実務の方面との交流が少ないので、この点が少し気がかりである。

以上の記述は、終戦前後という特殊な時期に、参謀本部という特殊な場所に動員されていた極めて異例の体験を、自分自身でどのように受け止めるべきか、改めて考え直してみたいと考えて、先ず、漠然とした記憶のみによる憶測を避ける意味で、さしあたり自分と直接関係のあった事項を、今回提供された記録資料と記憶とを対比しながら、改めて確認してみることに限定しつつ書いたものである。

この「外邦図」研究グループの主要な研究目標である「外邦図」そのものの保存・管理・活用の面に関しては、東北大学・お茶の水女子大学・京都大学・広島大学等の地理学教室の間で共通のデータベースを構築し、その公開利用をも可能にするようなシステム作りが行われていて、その組織的取り組みについては大いに感銘を受けるとともに、一日も早い成功を期待している。

他方、いわゆる「兵要地理（誌）」の問題、つまり地理学と軍事面との関係の歴史をどのように取上げ深めていくかという課題については、なお十分な検討を要する問題が多数控えているのではないかと考えるので、以下にまとめて取上げることにしよう。

2. 終戦直前の参謀本部「研究動員学徒」時代のこと

次にこの節では、上記の戦時下における「兵要地

理(誌)」をめぐる問題の背景を探るために多少とも参考になればという意味で、研究動員学徒としての私が参謀本部で一体何をしていたのか、について述べたいと思うのだが、その前に戦時下の学生としての私が、当時どのような状況のもとに置かれていたのかについて、個人的な回想を含めて若干触れておくことにしよう。

戦時下の東京

戦時下の東京は、食糧や消費物資の不足が深刻化してはいたものの、1944年後半に至るころまでは特に街中の様子に変化は見られなかった。市内交通の主な手段であった路面電車(当時の都電)に乗ると、「神宮前」や「九段上」を通り過ぎる際、全員起立してお辞儀をしないと車掌に注意される(もし軍人が乗っていたらただ事では済まぬことになる)など、軍国主義的風潮が日々強まってきていた(最近の都内小・中・高校での日の丸・君が代行事は、まさにその方向へ向っての予兆の感無きにしも非ずである。そうで無ければ幸いだが)。

私の旧制一高時代(1941～43年)は日米開戦の時期に当たるが、入学の前年に文相に転出した橋田校長に代わって京城帝大から移って来た安倍能成先生が、断固としてこの時局的風潮への防壁を護るといふ稀代の名校長の役割を果たしてくれたお蔭で、全寮制の校内では終始リベラルな空気が維持されていた。私自身について言えば、入学の半年後一年生の秋に病気で片眼を失うことになったため、同級生の多数が行く医学部進学をあきらめ、代わりに理科系の内ではむしろ人文社会系に近い地理学専攻を選択することに決めた。

私が旧制高校を終えて東京大学の地理学科に入学したのは、1943年10月という戦時下の短縮による変則的な時期で、しかも入学早々従来からの徴兵猶予制度が突然変更になり、同級の文科系学生の友人たちが根こそぎ軍隊に招集されるという、いわゆる「学徒出陣」世代と同じ学年に属していた。ただし、偶然、東大の地理学科が理科系(京都大学では文科系)に属していたので、私は辛くも兵役への招集を免れることになり、卒業まで徴兵を猶予されることになったのである。そして、ともかくも最初の一年間は講義や演習が例年通りに継続されていたものの、1944年秋になると地理学科でも正常な授業は困難な状況になってきた。

「満州国」辺境の村落調査への派遣

ところが幸運なことに、二年生になったばかりの

私たち同級の3名は、主任教授から文部省科学研究費の支給を受け、1944年10月から三ヶ月間当時の満州国辺境の農村調査に派遣されるという貴重な体験をすることになったのである(この調査旅行の経過については、別稿“三河紀行素描”、『空間・社会・地理思想』第5号、大阪市立大学発行、2000年、所載を参照)。

私がこの調査旅行に参加することになったのは、当時の時局に照応した研究課題として「大東亜における集落の地理学的研究」(辻村太郎東大教授)と「日本人の気候順化に関する研究」(岡田武松中央気象台長)という、両先生をそれぞれ主任研究者とする二つの科学研究費助成金を併せた共同企画の現地調査員として、当時の満洲国に派遣する3人の学生のひとりに採用されたからであった。

この研究のねらいは、東亜における諸民族の集落と、日本の内地とは異なった気候環境を持つ地域での日本人入植村落の生活状態を比較することが目標とされていた。そこで、当時の戦況等から見て、まだ何とか現地調査が可能ではないかと思われた旧満洲国の北部を調査地域とし、その中から、1)東北部の佳木斯(チャムース)近傍の日本人開拓村落、2)中北部の黒河(ヘイホー)付近の満州族の村落、3)西北部の海拉爾(ハイラル)の北方に位置する三河(さんが)地方の白系ロシア人開拓村落、の3地域を調査対象集落として選定し、1)は大貫俊、2)は小堀巖、3)は藤井(石井の旧姓)素介の3人の学生で、それぞれ調査を分担することになったのである。

ここではこの村落調査の結果を詳細にわたって述べることはできないが、私自身の場合の要点を挙げるとすれば、以下のように要約できるであろう。

三ヶ月近い満洲旅行中の約三分の一の期間を使い、1944年11月12日から25日間、大興安嶺山地西麓のホロンバイル高原の一角を占める三河地方に入り込み、ソ連の社会主義革命当時その動乱を避けて革命前後にシベリアのザバイカル地方から集団移住してきた、いわゆるカザック式開拓農民の寒冷地主畜農法と耐寒性に徹した白系露人の生活様式をつぶさに観察し、また村の秋祭りや偶然ある農家の結婚式にも参列する機会を得て、強烈な印象を受けることになった。その前の予備調査の段階には、ハイラル付近や旧王爺廟(現ウランホト)近傍の定住モンゴル人集落や、豊と障子の住居に固執している日本人開拓団をも訪問し、夫々の生活様式の相違の大きさに驚いたものであった。

それらと同時に他面では、ほんの瞥見に過ぎない

が、「五族協和」という「満洲国」の理想の旗印とは裏腹に、実際には関東軍のいわゆる「内面指導」の下に徹底的に抑圧されているこの国の行政の実態や、地域住民との人間的なつながりを持ち、政治の圧力との板ばさみに置かれて苦勞している出先機関の日本人行政官たちの献身的な姿など、「大日本帝国」の植民地支配の多面的な実状にも触れて、忘れることのできない強い衝撃を受けた。

歩み始めたばかりの研究者の卵として、このような強烈な体験をした調査旅行から帰国したのは、1945年の1月初めになってからのことで、東京はすでに連夜空襲警報に脅かされる戦局になっていた。とは言っても、たしかに日常的に空襲と生活物資不足の問題に悩まされてはいたものの、少なくとも2月から3月上旬の頃までは、大学構内においては比較的平穏な状態が保たれていた。しかし3月10日の東京下町大空襲を経て、3月末頃になるといよいよ情勢が緊迫し、理科系学生にも動員令がかかってくる情勢になってきた。

参謀本部への「研究動員学徒」としての派遣

そこでいよいよ1945年の4月から、同じ地理学教室の学生3人と共に私が動員先として割り当てられたのが、陸軍の中枢部である参謀本部第二部第七課であったのである。同じ参謀本部の中でも「作戦」担当の第一部とは異なり、この第二部は「兵要地誌」関係の情報担当なのだと言われ、第六課はソ連、第七課は中国というように担当地域が分かれているようであった。「地誌」の調査に地理学専攻学生の知識を役立てようというのが、ここに動員学徒を割当てることになった理由だったのではないかと思われる。

勤務先は、元陸軍士官学校が置かれていた市谷台の大本営陸軍部の中にあり、銃剣で武装した門衛兵の前を大学の角帽と学生服に腕章を巻き、身分証明書を見せながら毎朝通勤した。第七課の室は一階の大部屋で、軍人・軍属・事務員などが入れ混ざって机を並べる事務室のような場所であった。参謀肩章を着けた高級将校は別室にいたようだが、在室の軍人も将校ばかりで、少数の下士官以外に一般の兵士はほとんど姿を見せず、話に聞いていた様な厳しい軍隊内の雰囲気は幸にもあまり経験しなかった。また戦争末期の特別の緊張感というものなどあまり感じられず、例えば、身近の机にいた若い少佐などは、これから受ける陸軍大学校に行くための受験勉強に余念が無いという様子であった。昼食時になると動員学生は下士官食堂で食事をとることになってお

り、夕方になれば電車で帰宅するという生活であった。たまに空襲警報が鳴ると、全員で構内にある深い地下壕の奥の待避所へ歩いて行き、警報が解除になるまで壁沿いのベンチに腰掛けて新聞や雑談で時間を過ごすという状態であった。4月・5月のたび重なる東京の夜間大空襲でも大本営は無事だったらしく、結局、終戦になるまで参謀本部には爆弾も焼夷弾も落ちなかったようである。他方、それにひきかえ私個人のほうは、5月25日夜の空襲で千駄ヶ谷の下宿を焼け出され、神宮外苑付近の火炎をくぐって中央線のガード下まで自転車で逃げ延びて一夜を過ごしたのだが、蔵書や調査資料・カメラなど持ち物一切を失うことになった。

「研究動員学徒」担当業務の内容

ところで、第七課で与えられた仕事の内容は、主に各種の地誌資料を調べて会議説明用の地図・図表を作成するための準備資料を用意するという類いの机上作業であった。私自身が命じられた仕事としては、結局、三ヵ月半の勤務中を通じて次の課題が与えられたのだが、それは、次の二つの作業であった：

- 1) 「武漢反攻関連地区主要河川輸送能力判断表の作成」
- 2) 「西北支那諸民族調査資料の作成」

幸いなことに、当時作業用に使用したメモ書や試作一覧表等をひとまとめにした資料綴を入れた袋が、自宅の書庫に保存されていたのを最近発見したので、これに抛りながらそれぞれの内容を具体的に挙げてみることにしよう。

まず前者、すなわち1)「武漢反攻関連地区主要河川輸送能力判断表の作成」という課題の方は、揚子江上流（本来は「長江」のはずだが、軍ではこれを使用していた）（漢口－重慶－叙州）、江北地区・漢水（漢口－漢中）、江南地区・湘水（岳州－長沙－零陵）、資江（益陽－武岡－新寧）、（常德－鎮遠－秀山方面）、（慈利－桑植方面）、江西地区（九江－南昌－吉安方面）等、武漢地区周辺諸河川の主要河港区間を対象として、それらの区間距離、航行所要日数（汽船・民船別、上航・下航別）、一往復所要日数（揚搭日数加算）、船舶数（汽船は増水・減水期別）、一隻平均屯数、最大可航屯数（増・減水期別）、一日平均輸送量（推定）等の項目についてのデータを一覧表にせよ、という課題である。

データ算定に使用した資料としては、水路部作成距離表（1937年5月）、「奥地主要水路輸送力調査」

(支参地、1942年10月)、「湖南省兵要地誌概説」(1943年8月)、「支那の航運」(東亜海運社、1943年10月)、「江西省兵要地誌概説」(1943年12月)、「揚子江・漢水・湘江・洞庭湖輸送力調査表」(大陸第七課作成)、「揚子江流域五十万分の一水運地誌図」(大陸第七課作成、1945年)等の資料が利用されている。これらの資料は、多分第七課室内の書架在庫のものを利用したのだと思われる。データは推定のもので多く、「船舶数ハ資料ニオケル現在数ノ約半数ヲ収集可能ト認メ之ヲ取レリ」などと注記されている例からも、その精度の適当さの程度が推測される。

全体として利用した資料の源泉である各種のデータそのものが、他の資料からの孫引きの場合が多く、作成に手間がかかる割には精度の低い粗雑なものに過ぎないなどと思いながら計算していた記憶がある。主題の「武漢反攻」という語句が何を意味していたのか記憶がないのだが、当時日本軍が占領していた武漢地区に向かって重慶や南方から反攻してくる敵軍の反攻規模・速度等を判定するためだったのか、それともわが軍の撤退の場合の水運利用効率を判定するためだったのか判らないが、いずれにしても終戦直前のこの期になって、こんな杜撰なデータで大丈夫なのかなと、半信半疑の作業であったのは間違いない。もちろん、われわれ動員学徒などに割り当てられた仕事が中枢的な重要課題であるはずはなく、多分それ以外の重要度の低いものだったのであろうが、漢語主体の文語文で、報告の最後は必ず「判決(結論の意)」で締めくくるといふ、いかめしい文章の割にはやや内容空疎な軍隊特有の報告書類には、いささかならず辟易させられたものであった。

次に後者、2)「西北支那諸民族調査資料の作成」

という課題の方は、もっと漠然とした課題で、西北支那、つまり西安や延安よりも西北方の陝西省・甘肅省・寧夏省・青海省・新疆省の中国各省、および蒙疆・外蒙・満洲国を含む地域を対象に、各地域に住む諸民族の種別ごとに、人口数・主たる分布地域・宗教事情・生業・言語・その他、衣食住から民族性の特徴や政治的変遷等の統治事情等々に関する特徴を、各種文献資料から要約して一覧表を作成せよ、というものであった。

民族の種別としては、漢族、満州族の他、回教徒(漢回族[いわゆる東干トンガン]・纏回族・土爾其族)、蒙古族(ハルハ・ブリアート・オイラート・デュルベツト・その他の各種族)、西藏族(州により細分)、蕃族、その他を区分するもので、新疆省(東トルキスタン)

では、ウイグル・キルギズ・カザック・トンガン・タタール・タジック・白系露人まで区別されていた。また一部旧ソ連領の中央アジア諸国の民族構成についても調査対象に入っていた。

これらの調査項目についての主要な情報源としては、東亜同文書院篇『新支那年鑑』各年版、東亜同文会編『新修支那省別全誌』のシリーズ、『ソ連年鑑』(1940年版)等一般的な基礎資料のほか、満鉄・竹内義典『新疆の民族』(?年)、小林徳氏研究資料(?年)、鳥居龍蔵『苗族調査報告』(民国25年)なども利用されている。

軍事史の専門家藤原彰氏によれば、もともと日本陸軍の「仮想敵国」であったソ連軍については研究を重ね、綿密な作戦計画を立てていた³⁾。参謀本部にも、「対中国戦争についての本格的作戦計画は存在しなかった」らしく、それは中国の国内情勢が国民政府と中共軍に分断されている上に、各地に軍閥や匪賊が群雄割拠する状態であって、近代的統一国家であるとは認めず、恐れるに足りないのだという陸軍首脳部の中国人蔑視を含む現状認識によるものだったようである³⁾。そのためであったのかもしれないが、中国の他の地域の場合に比べ、とりわけソ連に向かって最前線の位置に当る西北支那地域の兵要地誌や在任諸民族に関する各種資料が多数書棚に並んでいたようで、当時の作業に使用したメモ書きの中に、利用した西北民族資料の一覧表が記載されていた。

参考のために一部列記しておく、以下の通りである

- a. 「内蒙兵要地誌綴(其五)」、
 - b. 「西北支兵要地誌調査資料(寧夏・オールドス)第八編統治資料」、
 - c. 「同(熱北・シリングル)民族分布要図」、
 - d. 「伊克昭盟兵要地誌資料・住民」、
 - e. 「オールドス・伊盟兵要地誌資料・住民」、
 - f. 「陝西省政治経済調査(政治篇)」(華北交通・富永機関1945年1月)、
 - g. 「第四次西北調・其二：漢回蒙蔵統治要領」、
 - h. 「第四次西北調・中亜概況：ソ連領中央亜細亜ノ産業概況ト民心動向」、
 - i. 「西北情勢判断資料：西北統治要領」、
 - j. 「西北情勢判断資料：別冊付図」、
1. 西北民族統治要領概見図
 2. 西北民族現状概見図
 3. 西北民族分布概見図

4. 甘肅省民族別人口分布概見図
 5. 西北民族確執概見図
 6. 新疆省民族分布概見図
 7. トルコ民族分布概見図
 8. 新疆省ニ及ソソ・英・支ノ支配力概見図
 9. 青海省民族分布概見図
- 以上。

以上の資料には精粗様々なものがあり、『新修支那省別全誌』や『新支那年鑑』など、東亜同文書院の永年の研究蓄積の収録された資料のように、読んでみて教えられることの多い水準の高い資料もあれば、客観的な根拠も示さず独断と偏見に陥っているのではないかと疑念を抱かせる類の資料も含まれていた。

これらの資料を利用して作成した成果として、大判の中国大陸の地図の上に、屯数別可航水路や民族分布状況などを色彩別に区分して書き入れた成果図を作成した記憶があるのだが、それがどのように活用されたのか、利用されない内に終戦になってしまったのか、その辺のことは記憶に残っていない。ただ、幸いそれらの準備過程で軍用罫紙にメモ書きした手づくり資料集を保存していたので、それらに基づいて上記のような作業内容を何とか復元し記録することが可能となったわけである。

終戦前後の参謀本部職場の状況

1945年の6月ごろになると職場での雑談から各地での戦況の不利が断片的に聞こえてくるようになった。その頃、多分6月中旬の頃、地誌班の一部が駿河台の明治大学校舎に移動させられた。どういう事情で移転することになったのかその理由は不明だが、明大では旧記念館の向かって左側の四階部分が軍に接収されていたように記憶している。それから終戦までの約二ヶ月ほどの間、毎日ここに通勤していたのだが、当時の出来事はあまり記憶に残っていない。

はっきりと覚えているのは8月14日以降のことである。その日、「午後市谷台の方へ全員集合するように」との緊急指令が出され、何かと思いつつ仲間と電車でそこへ駆けつけた。真夏の暑い日だったと思うが、大本営の中庭にわれわれ大勢が集まったところで、第二部長であった有末精三中将が壇上に上り声涙共に下場の訓示をされた。その内容は殆んど覚えていないのだが、次のような部分だけは、はっきりと記憶に刻まれている。すなわち、「本

日昼過ぎの御前会議で、ポツダム宣言の受諾が決定された。明15日の正午に陛下の詔勅が放送される予定である」、「一週間か10日の内には、この大本営を占領軍に引き渡さねばならぬ。そのため不要物の焼却処分等、庁舎内の整理に早速取り掛かって貰いたい」、「動員学徒の諸君には特に言っておきたい。日本が米英との戦いに遅れをとったのは、何よりも科学技術の力の格差が大きかったことである。諸君はこの事を肝に銘じて戦後日本の再建のために努力して貰いたい」等々。これは、それから10日余の後、厚木飛行場でマッカーサー元帥を出迎える日本側代表になった有末中将自身の、恐らく本心そのものだったのではないかと思う。

何しろ正式終戦の前日のことなので、御茶ノ水へ帰る電車の中でも「日本が負けた」ことなどおくびにも出せず、口を結んで駿河台に戻ったものである。その日は夕方から早速書類の整理焼却に着手することになった。山のように積み上げた書類の焼却処分にとり掛ったのは、現在錦華公園になっている場所辺りであったが、長い竹竿でかき回してもなかなか書類が焼けなかったこと、既に焼け野原になっていた神保町・猿楽町辺りを越えて水道橋駅まで夕陽の中に良く見通せたのが印象として残っている。翌8月15日正午の終戦詔勅の放送は、明大校舎本館南側一階にあった半円形の階段教室に集合して聞いたのだが、内容はほとんど聞き取り困難であった。

明大校舎での勤務はその日で終り、その後の3日間は市谷台の方の整理作業に従事した。驚いたことに8月16日以降は、大本営入り口の門衛兵が不在となり、出入りが全く自由になった。焼却の煙は各所で上がっていたが処理が間に合わず、第二部各課の隅に焼却可の書類が積み上げられていた。整理の仕事はそれからまだ数日を要したようだが、動員学徒は占領軍に責任を問われないように8月17日をもって動員解除とする、という事になり、同日の夕刻大本営の門を退出した。

以上は、参謀本部における研究動員学徒としての四ヶ月足らずの体験のあらましを述べたものである。これは、あくまでも現在の時点からの回想であって、その当時私が何をどのように考えながら暮らしていたのか、については何とも言いようがないというのが正直なところ実状である。何とでも言えるような気もするのだが、これはまさにギュンター・グラス(2008年)⁴⁾の話と同じで、記録や自分の行動で推測する以外に良い方法はない、と言えるのではないであろうか。

3. 地理学の軍部・行政との協力をめぐる問題点

「皇軍」における「兵要地誌」のあり方

ただ、当時、私が垣間見た日本軍、いわゆる「皇軍」における「兵要地誌」なるものの性格や位置づけとその取り扱い方について、ここで一言しておきたいと思う。

前記のように、「西北支那諸民族」に関する列記資料の中には、(a.)～(e.)のようにはっきりと「兵要地誌」と題した資料や、軍のいわゆる特務機関による政治動向調査(f.)、「統治要領」・「民心動向」の調査(g.,h.,i.)など、軍自身が作成した「兵要地誌」的な資料が多数含まれている。これらの内容を見れば、軍が作戦立案のために必要とする情報源としての「兵要地誌」なるものの性格がどのようなものであったのか、をある程度うかがうことができるだろう。

例えば、「陝西省政治経済調査」(f.)からの抜書きを見ると、「コノ省ニオケル政治的形態ハ重慶ノ三民主義ト延安ノ新民主主義トノ鋭キ対立ヲ以テ表現セラル」と的確な指摘をした上で、孫文以来の三民主義と中共の新民主主義の内容、また中共の民族理論や対回民工作・対東干領導方策等について詳しく解説を加えている。特に治安状況については、「閩中地区ノミニテモ民国以来歴年ノ内乱ニヨリ民間ニ流散セル武器ハ極メテ多数ニシテ」、「民間武装ノ侮ル可カラザルヲ知ルベシ。特ニ最近ハコノ民間武力ニ注目シテ之ヲ抗戦ノ一翼ニセシムベク當路者ニ於テ躍起ノ工作ヲ為シアル模様ナレバ萬一ノ場合ニオケル民間ゲリラ戦ノ活発ヲモ考慮スベシ」と、仮想敵国に対する作戦を準備策定するに当たっての要点を鋭く指摘している。

これに対して、諸民族に関する調査の分野になると、諸民族の生活の実態を客観的に究明するというよりも、作戦計画のための「宣撫工作」あるいは「諜報工作」における、それら諸民族の適否やその「利用価値」というような面に焦点を向けた、いわば「即戦力」的な側面に関するものが多いことに気付かされる。とりわけ諸民族の「特性」に関する記述においては、例えば、保守勤勉、勇敢精強、剽悍尚武、民情純朴、従順質素、忍耐力、貯蓄心等々の称揚語や、頑迷固陋、軽挙妄動、付和雷同、優柔不断、暗愚粗野、狡猾敏捷、金銭打算、排他心、無気力等々の侮蔑語を散りばめた一方的な評価を加えた上で、いきなり「服従追隨ヲ期待シテ可ナリ」とか「利用価値大ナリ」とかの判断を下してしまうような記述には、上に述べたように、終戦前年の暮れに旧満州

国で体験した異民族の生活実態観察を想起するにつけても、むしろ強烈な違和感を禁じ得ないところである。

以上に述べた観察は、いわゆる「兵要地誌」の中のほんの一部分を取上げたものに過ぎないが、それにしても、これらが客観的な情勢判断の根拠としてのどの程度使いものになり得たのかどうか、疑問を感じざるを得ないであろう。

本来、万一の緊急事態発生を想定して戦争の危険に備えるのがいわゆる安全保障の問題、つまり当時の用語で言えば国防であり、関係地域の実態を分析して国防に役立つ情報を提供するのが「兵要地誌」の役割であったとするなら、上記のような内容の記述が、はたして本来の兵要地誌の名に値するものと言えるであろうか。またそれとは逆に、この程度の内容のものが「兵要地誌」であるとしても、これが実際の作戦実行に際して果たして信頼に足る情報とされたのかどうか全く疑わしいものだし、またこのような内容のどこに地理学が協力できる余地があったと言えるのであろうか。むしろ元来日本の軍隊が、真に科学的分析を積み重ねた信頼できる兵要地誌に基づきつつ作戦計画を立てて実行に向かうという体制を、一体まともに確立していたのかどうか、またそういう意図がどの程度あったのかという問題の方をこそ、本格的に検討し直してみる必要があるのではないであろうか。少なくともこの点は、今後に残された重要な検討課題であろうと思われる。

応用地理学の立場についての批判的検討

さらに、安全保障問題への地理学の協力関係を考えるに当たっては、兵要地誌の場合のように直接軍事に係わる分野に限らず、もう少し視野を広げて国際的な安全保障関係や国際協力・途上国援助の分野にまで視野を拡げる必要があるだろうし、また、国内の国土利用や環境保全の問題への地理学の役割を考える場合でも、政府や自治体の担当する公共的政策の立案に際して、地理学的な視点・方法からの研究成果が役立つ可能性を持つ領域が少なからず存在するのではないかと思われる。そのような場合に地理学の果たすべき実践的役割を考える分野、すなわち、いわゆる応用地理学がその役割を担う分野である。諸外国に比べて日本の地理学界では、この応用地理学の分野を本格的に取上げた研究は未だあまり多くないようだが、今から40年ほど前に、私はこの分野の研究に着手する場合に心すべき問題に言及し、資源論と日米の資源政策について批判的検討を行ったことがある⁵⁾。

ここでは、地理学者がこうした応用課題の研究に取り組むに当たっての姿勢の問題、つまり研究者としての社会的責任についての自省如何を問題にしている。すなわち「科学が客観的真理を追究するものである以上、それは政策的実践と厳密に区別されねばならない。しかし科学と実践とは無関係ではない。科学によって究明された成果は、これが実践的に応用される場合に判断を下す客観的基礎となる（逆にその信頼性を試されることにもなる）」⁵。従って「政策そのものを研究の対象とする政策論の課題は、自から政策を立案することではなく、批判的にその成否・功罪を究明し、冷厳な政治経済の法則性がそこに貫いている点を示すことにある。そのことによつてのみ、政策立案者に正しい科学的根拠を提供し得る」のであって、その政策立案者に「奉仕＝妥協する立場からではなく、逆に客観的・批判的な立場から問題を究明することによつてこそ、かえって真に 응용科学たり得るのである。この点を曖昧にしたままで応用課題に取り組むことは、科学的武器を磨くどころか、科学としての地理学の（信頼性を傷付け）墮落を招くことにもなりかねないであろう」と指摘している。

これは政策科学の一翼をになう応用地理学の立場にも当然共通するキーポイントであり、かつての「兵要地誌」のあり方についての歴史的な批判・検討を行う場合や、これに対する当時の地理学者の協力の仕方についての検証という問題を取り上げる場合にも、研究者として充分に心しておくべき点を含んでいるのではないかと考えて、敢えて引用させて頂くことにしたものである。

地理学の戦争・開発への協力、ならびに軍部・行政側の科学軽視の両側面の問題

また特に後者の問題、つまり地理学者の戦争協力についての検証という問題を取り上げるに当たっては、短絡的な結論を急がず、慎重な取り組みが望まれる。それは、言うなれば「不本意ながら」、事実上他国への侵略戦争に邁進する祖国に生活の基盤を置くことになってしまった当時の研究者たちが、やむを得ずとらざるを得なかった祖国への奉仕の姿勢と、その中に込められた人間としての苦悩やささやかな消極的抵抗とを、少なくとも包括的かつ複眼的に捉えようという視点が必要とされるのではないかと考えるからである。実はこの問題は、終戦を挟んで戦後を生きている私たちにとっても、決して他人事では済まされない問題、すなわち、無謀な戦争を惹き起こした戦時下のこの国に暮らしていた日本人

と、戦後を生きる日本人とは、否応無しに明治以来の日本の近代史・現代史の遺産の上に、それらの到達点を土台として踏まえながら生きているという、言わば共通の責任を背負っているのだからである。

日本の近代史を突き動かしてきた諸要因は、決して終戦の時点で突然解消されてしまったわけではないはずなのに、私たちの胸の中には何となく戦後の混乱の中で「軍国主義」の船から救助に来た「民主主義」の船にポンと飛び移ったかのような安堵感が無意識のまま潜在し続けているかもしれないのであり、それが未だに、あれで良かったのだろうかという「終戦時のけじめ」の曖昧さへの違和感として、未決着のまま引きずり続けている気がしてならないのである。

また、その反面では、終戦の直前に有末中将がはっきりと述べていたように、戦争遂行に当たって「科学技術」的判断を軽視し、その力の日米格差を無視したまま精神力の鼓吹のみに執着してきた「皇軍」の伝統は、程度の差こそあれ戦後日本の国土開発行政をしゃにむに推進してきた、中央集権的官僚システムの「伝統的」手法として、形を変えて継承されているのではないであろうか。それは、かつて戦後の占領行政の末期に経済安定本部にいた大来佐武郎氏が、日本の中央行政官僚システムにおける科学的合理主義精神の徹底的軽視の伝統を批判した「思想」論文(1957年)⁶の問題提起にも通ずるであろう。

これに対して、かつてノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎氏は、「政治家、科学者、技術者の最も美しい協力の例」として、1932年に完成したオランダのゾイデル海のダム（締め切り堤防）の建設計画に際して「ローレンツ委員会」の果たした役割について紹介している。1916年1月の高潮でアムステルダム近傍の洪水被害を受けた同国では、ゾイデル海の入りをダムでふさぐ大計画を立てたが、ダムによる潮位変動の予想値に諸説が出て紛糾し、政府は1918年潮位予測の検討委員会を設け、その委員長に有名な理論物理学者のH.A. ローレンツを指名した。委員会の研究活動は多数の験潮儀設置から始まり、浅海湾への潮流出入りの数値解析モデルとその各種地形海湾での4年間に及ぶ数値実測との照合検証を行い、続いて北海沿岸の暴風高潮の場合の予測潮位計算には、さらに4年間の年月を要し、ようやく1926年に最終報告を女王に提出した。そのおかげで国土の沿岸を護る防潮堤の高さは当初の予想をはるかに下回り、工事期間も4年短縮されて竣功したが、その後何度も襲ってきた高潮の潮位

は、ローレンツ委員会の計算値と驚くほど一致したと言われる。

朝永氏はこの委員会活動からの教訓として、その驚くべき徹底した科学性と諸分野の科学技術者間の協力体制、また8年間に及ぶ理論的・実験的な研究の徹底振りを許した政治家の識見・度量と科学者への信頼感の大きさを挙げている。その上で、最後に「わが国のいろいろな開発計画は現在でもなお、(こうした計算し尽くした予測に基づくやり方でなく) 言わば“暗闇へのジャンプ”方式でやっているように思われてならないが、これがもしまちがいであれば幸である」と結んでいる⁷⁾。

このような先進的な外国の実例と対照させて、政治・軍事と学問との関係を考えてみると、日本の場合、もちろん応用科学の側の力不足の問題もあるだろうが、それと同時に、むしろ学問の力に信頼を置いてこれを活用することを頭から尊重しようとしないうる戦前以来の政治のあり方、軍事のあり方の方に、より深刻な問題が伏在しているのではないかと痛感されるのである。こうした日本社会の基底に現在なお存続している基礎的な問題との関連への配慮を欠落させたままで、日本における兵要地誌のあり方や地理学者の軍部への協力関係についての現象面だけに着目する研究に向かうとするなら、やはり強い疑念を抱かざるを得ないことになるだろう。

注

- 1) 源昌久(2007): 英国海軍情報部作成の Geographical Handbook Series に関する一考察— China Proper を中心に一、「空間・社会・地理思想」第11号、p.17.
- 2) この陸軍士官学校で使用されていた教科書『地学教程』の内容については、渡辺光先生追悼録刊行会編集発行『渡辺光 その人と仕事』(1985年、426頁)に雨宮正氏の記述があり、近刊の「外邦図研究ニューズレター」No.7に掲載予定の拙文の中で紹介しておいたので参照されたい。
- 3) 藤原彰著(2006)『天皇の軍隊と日中戦争』(大月書店、28頁以下)参照。
- 4) ギュンター・グラス著・依岡訳『玉ねぎの皮をむきながら』(集英社2008年)
- 5) 石井素介(1969): 資源開発論(朝倉地理学講座、第13巻『応用地理学』に所収)、これはほぼそのまま、「資源論についての批判的一考察」と題して拙著『国土保全の思想』古今書院、2007年、154頁以下に再録されている。
- 6) 大来佐武郎(1952): 現代日本の行政と科学、「思想」(岩波書店)No.334、1952年4月号[特集: 科学と政治]、pp.61-67. なお、この問題については、近刊の別の拙稿⁸⁾

二次大戦後の占領下日本政府部内における「資源」政策研究の軌跡— 経済安定本部資源調査会における〈資源保全論〉確立への模索体験—、(明治大学文学部紀要「駿台史学」第138号2010年に掲載予定)の中で立ち入って論じているので参照を乞う。

- 7) 以上の逸話の詳細は、朝永氏執筆の“ゾイデル海の水防とローレンツ”、雑誌「自然」1960年1月号所載、これはその後、朝永振一郎著『科学者の自由な楽園』岩波文庫、2000年、に収録されている。

付記

この論文は、外邦図研究グループ(大阪大学人文地理学教室)編集発行:「外邦図研究ニューズレター」No.6、2009年3月発行、に収録・掲載(pp.47~60)されたものに若干の修正加筆を施したものである。なお、この論文に対して源昌久氏から頂戴した2-3の質問への回答として書いた原稿が、「戦時下「皇軍」の「兵要地誌」と地理学者の関与をめぐる」と題して、近刊の「外邦図研究ニューズレター」No.7、に掲載される予定なので、参照されたい。



▲ 1945年4-8月 学徒動員